

高砂の梗概

九州肥後の国、阿蘇の宮の神主友成、都へ上る道すがら、播州高砂の浦に立ち寄り。こゝに老人夫婦来たりて、松の木影を清むるにより、高砂の松はと尋ねれば、老人はこの松なりと指し教え、「高砂、住の江の松を相生の松といえるは、古今集の序より出でたることにて、高砂を万葉集の上代に、住吉を今の延喜の御代に譬えたるなり」と説き、さらに松の万木に優れて目出度き木なる謂われを語り。友成すなわちその名を問えば「我等は住吉と高砂の松の精なるが、いま仮りに相生の夫婦と現われ来たりたり、住吉にて再び見ゆべし」といふ捨て、小舟に乗りて海上に去る。友成、住吉に行きて見れば、住吉の明神すなわち御姿を現し給ひ、舞樂を奏して君が代の千秋万歳を壽ぎ給うたり。半能

経政の梗概

幼少の頃より仁和寺の宮に仕えて管絃の名手なりし平の経政は、一の谷の戦にて討死せしにより、君不憫に思召し、僧都行慶をして経政の遺愛せし青山という琵琶を仏前に供え管絃講にて法事を執り行わせらる。されば経政の霊、甲の声に引かれて影の如くに現れ出で、在りし昔の面白かりし夜遊の有様を思ひて、憧憬れる心を述べ、曾て琵琶を弾じて御堂の空にその音漂いし時、大絃小絃相和して、或は急雨の如く或は私語するに似たる風情、衣笠山を月下に望みて華麗なる袖を返せし趣、それらに関する夢幻的追懷を述べなどしたる後、瞋恚の姿を見られたるを耻じなどありしが、やがて修羅の妄執に責められて苦患を受くる有様を見せ再び影の如くに消え失せしとなり。

舟船の梗概

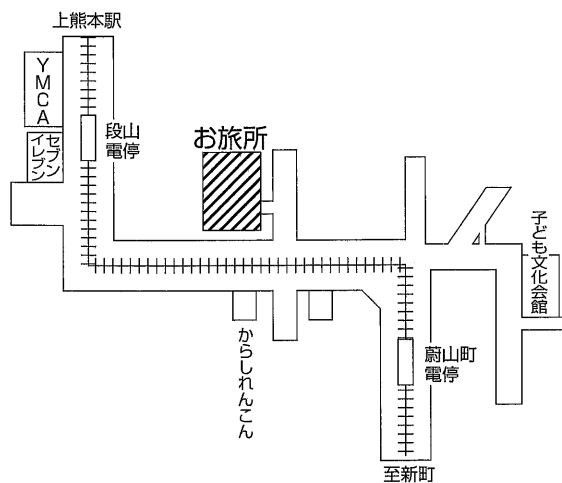
この辺りの者が太郎冠者を伴い遊山に出かけ、道中大きな川へさしかかります。主人が舟も橋も見えないがどうやって渡るのかと尋ねるので、舟を見つけた太郎冠者は「はい。船やーい」と呼びます。それを聞いた主人は「ふね」というて呼べと叱ります。しかし、太郎冠者は昔から「ふな」とは言うが「ふね」とは聞いたことがないといひ、「ふな」と詠まれた歌を吟じます。主人は負けまいと「ほのぼのと、明石の浦の朝霧に、島隠れ行く、舟おしぞ思う」と、歌を詠みます。この「フネ」と「フナ」の呼び方について、主人と太郎の押し問答が始まります。

羽衣の梗概

三保の松原に、白龍という漁夫あり。ある日松の枝に美しき衣かゝりければ、取りて帰らんとせしに、いと美しき女出で来たり、「それは天人の羽衣とてたやすく人間に与えがたし」といふ。白龍は羽衣と聞きて増々喜び、国の宝ともなさんとて返さざりければ、天人は羽衣なくて天上へ帰ることかなわず、雲の流れ、雁の渡るをも羨みて、たゞ泣き悲しみける。白龍もついに痛ましさをあまり、「天人の舞を見せ給わば衣を返すべし」といふければ、天人せん方なく羽衣を身につけ、天上界の有様を述べて舞をまい、君が代の限りなかるべき壽ぎつゝ、舞いながら次第に天に登りて、富士の彼方の霞のうちにぞ隠れる。

熊坂の梗概

都の僧東国修行の途中、赤坂の宿にて一人の僧に呼びとめられ、「今日はさる人の命日なれば弔いて給わり候え」と乞はる。「さる人とは何なる人ぞ」と問えどもその名を語らず、たゞ弔いて給われという。怪しと思ひながらも乞はるるままにその庵室に入れば、絵像木佛の形はなくて大長刀、金棒その他の兵具をひつしと立て並べあるより仔細（しさい）を問えば、「この辺りは山賊夜盗の巢窟にて物騒の所なれば、行き來の人々禍（わざわい）を受くること稀ならず、さよふの時は飛び出でんための用具なり、似合わぬ僧の腕立ておかしと思ひ給うべし」など語り夜もふくれば、まどろまんとして寢室に入るよと見る程に僧の姿も庵室も消え、松影に夜を明かしていたりなり。その夜も早ふけ行く頃、熊坂長範（ちようはん）の霊現われ、長刀を振るいて牛若丸と渡り合ひたる時のことなど物語り、末の世を助け給えといひ残し、松影に隠れ失せけり。



藤崎八幡宮例大祭

御能組

令和七年
第四百十六回

御能組

日時 九月二十一日(日)九時
場所 段山御旅所 能楽殿

雨天決行

素謡

喜多流

翁

狩野了一

狩野祐一

半能

喜多流

高砂

友枝雄人

飯富雅介

高安受壽

白坂保行
古田寛二郎

吉谷 潔
相原 彦

能

金春流

経政

秋山純晴

岡 充

白坂保行
古田寛二郎

浦 政徳

狂言

和泉流

舟船

田寫晴雄

山内理至

能

喜多流

羽衣

山本友晴

坂苗 融

白坂信行
飯富孔明

田中 達
森田 光次

半能

金春流

熊坂

田中秀実

飯富雅介

白坂信行
飯富孔明

田中 達
浦 政徳

附祝言